

## 新刊紹介

食の安全考－食中毒と狂牛病を中心に

篠田純男（岡山理科大学）著／発売元：㈱リフレ出版／

〒113-0033 東京都文京区本郷2-35-17-204 / TEL 03-5842-6415 /

A6版 / 213頁 / 価格 1,500円（税別） / 2005年5月9日発行

本書は「食品の安全」を「その危険性」の面からわかりやすく解説している。まず「口絵」で食の安全の基本は水が安全であることから始まり、食品に100%安全と言えるものはないが、科学的にほとんど安全と言えるものでも消費者が安心感を持たない場合がある。一方、危険性をはらんでいるものでもその認識がなければ、安心して食べており、安心と安全はイコールではない(安全と安心に乖離がある)。著者は情報・知識のポイントを正確に知れば、身を守るのに役立つし、食に対する安心感を与えられるとの思いで本書を書いたと述べている。その目次は以下のとおりである。

### 第1章 食中毒と経口感染症

- 1 はじめに
- 2 食中毒とは
- 3 微生物と食品＜敵にも見方にもなる微生物＞
- 4 微生物性食中毒
- 5 その他の経口感染症
- 6 微生物性食中毒と経口感染症の予防

### 第2章 動植物と化学毒

- 1 動物の毒
- 2 植物の毒
- 3 カビの毒＜マイコトキシン＞
- 4 アレルギー様食中毒＜魚の成分変化で起こる食中毒＞
- 5 化学物質による食中毒

### 第3章 食の安全問題アラカルト

- 1 はじめに
- 2 狂牛病（BSE）問題＜安全性と安心感の大きな乖離＞
- 3 環境汚染と食品汚染
- 4 農薬と食の安全性
- 5 食品添加物の安全性
- 6 遺伝子組替え食品

7 放射線照射食品＜放射線殺菌で保存性を高める＞

8 食物アレルギー

その内容は詳細、かつ多岐にわたっている。第1章食中毒と経口感染症の2 食中毒では、食中毒原因物質、食中毒病原体としてのウイルスの登場及び食中毒の発生動向、3 微生物と食品では、もっとも身近な生物としての微生物及び自然界の掃除人としての微生物、微生物の善玉・悪玉及び20世紀に制圧できなかつた人類の脅威としての感染症、4 微生物性食中毒では、敵を知る、代表的な食中毒微生物、赤痢・コレラ及びウイルス性食中毒、5 その他の経口感染症では、リステリア症、ビブリオ・プルニフィクス、クリプトスポリジウム及び寄生虫症の順で簡潔に整理されて記述されている。また、第3章食の安全問題アラカルトでは、2 狂牛病（BSE）問題において、プリオン病、狂牛病の発生状況、人のプリオン病、医原性クロイツフェルト・ヤコブ病、狂牛病の検査体制及びプリオン病に対する安全性と危険性、3 環境汚染と食品汚染では、水俣病、イタイイタイ病、油病及びダイオキシン類汚染と続き、いずれも章ごとの主項目にその内容を要約したサブタイトルが付けられ、目次からその概要が理解できる仕組みになっている。また、本文中にホツリヌス毒素の功罪、シラス中毒事件と腸炎ビブリオの発見など13の「コラム」が設けられてさらに理解度を高める工夫がなされている。

あとがきでは、狂牛病雑感におけるリスクコミュニケーションの重要性、食の安全安心と食品企業のモラル、水の衛生、最後に食品の安全確保として非破壊検査への夢が述べられている。また、巻末には各章ごとに注や参考文献を付けているのは有難いが、参考文献の中に本誌が載っていないのは、残念である。

本書は、食中毒と食の安全問題全般が平易に理解できる欲張った内容の成書であり、本誌の読者には是非一読をお勧めする。

（学会事務局）